

素人小説

第 15 回 「違い過ぎる 2 人の経
営者」



株式会社 BSO

・まったく知らなかった2人

・宮城という人間

- 一. 真剣でないと付合えない宮城
- 二. やる気を尊重する宮城
- 三. 意見の違う人とも付合うことのできる宮城
- 四. 世話になった人をいつまでも尊敬する宮城

・藤井という人間

・ふたりの関係

- 一. 自分しかないと思っている藤井
 - 二. 利用されやすい藤井
 - 三. できない人間を活かせない藤井
 - 四. 一度嫌いになったら敵にしてしまふ藤井
 - 五. 派手好きな藤井
- 一. スターター藤井、フォロワー宮城
 - 二. 親友らしきものがない藤井
 - 三. 宮城の人脈に頼る藤井

「まったく知らなかった2人」

宮城良治は、藤井俊夫と付き合うようになって、もう20年ほどになる。それまで食品製造業を営んでいる宮城と、鉄工所を営んでいる藤井とは面識もなければ、勿論取引もなかった。2人の共通点といえば、育ったところと経営している会社の所在地が同じ市にだというぐらいであった。年齢は藤井の方がひとつ上で、ほとんど同じ時代に同じ街で過ごし、その地の同じハイクラスの社会に属する家庭ではあったが、子供のころの交友は全くなかった。

性格的にも、宮城と藤井は水と油以上の違いである。

「宮城という人間」

一．真剣でないと付合えない宮城

宮城は自分でとことん考える。考えられそうにないと判断したときは、相応しい人間を探す。その人間に担当させようと決めたら、基本的にはやり遂げるまで、代えることはない。たとえそれが拙い事であっても、自分が責任を負える範囲で、担当させた人間がギブアップしない限りは取り組ませる。また、誰かに考えさせるときは途中で関わることはせず、最後まで考えさせ、自分が納得できるまで問い掛ける。

二・やる気を尊重する宮城

宮城は誰かに担当させるとき、改まった場で話すよりは、日常会話の中でさらっと話しをする。そのため、相手が鈍いと、頼まれたことに分かっていないことがある。反応がなかった相手には繰り返して「頼む」ことはない。また、余程のことがない限り、鈍い人間に活躍の機会を作ってやることはない。

三・意見の違う人とも付合うことのできる宮城

そのため、他力本願の人間では宮城と付合うことは難しい。自分の考えや意見をちゃんを持ち、実践力・実行力がなければ宮城のもとでは務まらない。考え方が極端に宮城と異なっているとしても、宮城は真剣に付合う。色々な角度から自分の会社が置かれている環境の構造的変化を予測したり、多方面の分野の人々の話に耳を傾け、それらの情報を基に中長期の経営計画をつくり経営する。几帳面で堅実かつ地味な経営ではあるが、同業者ですら宮城とは安心して付け合おう。

四・世話になった人をいつまでも尊敬する宮城

宮城は、人付き合いを大切にしている。仕事での関係がなくなり、殆ど付き合い合う意味がなくなった人ともいつまでも交流を保つ。転勤族などでも一度知り合ったら付き合いが続くので色々なところに知り合いがいる。視察旅行などでちよつとでも時間ができると、これらの人に会いに行く。こまめというか、兎に角、律儀である。

また、宮城は自分が世話になった人への感謝の気持ちをいつまでも持ち続ける。宮城が修行した会社の直属上司が定年退職し再就職口がなく困っていることを聞いた宮城は、その人の子供が社会人になるまでの間、品質管理者として迎え処遇した。

「藤井という人間」

一、自分しかないと思っている藤井

一方、藤井は何か考えるときは、荒っぽくても、間違っているとしても、そのとき自分がこれだと思ったら、関係者に自分が描いた構想を「これが最高のものだ」とか「これしかない」「これで行くぞ」とぶつける。決して、確信を持って皆にぶつけているのではない。ぶつけてから、走りながら自分も考え、周りを考えざるを得ない状況に巻き込む。周りが反応したり考えたことを貪欲なまでに吸収し、平気で自分のものにしてしまう。藤井は、周囲の知的財産の提供を受けながらも、感謝するようなことはない。むしろ、自分がすべて発

案したものであると思ひ込んでゐる。そして、藤井は自分以上の考えができる社員がいな
いと言つては嘆く。

二・利用されやすい藤井

構想を平気で替へてしまふ。このような移り変わりについて、できる人間や自分の主張
を持つてゐる人間からは好感をもたれてゐる。自分の目指してゐることが藤井を通して実
現できるからだ。

藤井は自分の構想を、関係者が情熱的に、取り組んでゐることに満足してゐるが、もし
かしたら自分を持つてゐないのかもしれない。

三・できない人間を活かせない藤井

自分に与えられたものを仕事や作業レベルでしか受け止めることができない人は藤井
に振り回され自滅してしまふ。自滅しても会社に残させてゐることが、また藤井の不思議
な一面でもある。

四．一度嫌いになったら敵にしてしまう藤井

藤井が有能な社員として採用した人間でも、自分の意に添わないことがあるとその後は一挙に態度が激変する。これ以上に出来が悪い人はいないといった扱いをする。これに耐え兼ね辞めた幹部や上級管理職は多い。これらの退職者は、競合企業などに再就職し、必ず藤井の悪口を言う。悪口を言う方も言う方ではあるが、藤井をよく知っている人はあながち悪口を否定できないと思っっていることも事実である。

五．派手好き藤井

藤井は、挑戦的で派手な経営を行う。社会に話題を振り撒くことが良くある。藤井の会社の記事がよく新聞に掲載される。事業規模の割には、知名度がある。

「ふたりの関係」

一．スターター藤井、フォロワー宮城

藤井本人は口では嫌いだというのが、結構色々な公職に付く。また、様々な活動を発案する。しかし、親分肌とは違う。

藤井の発案で何かが始まると、それをフォローする人間が必ず必要になる。そして、そのフォローする人間は、藤井の支援を受けずに進めなければならぬ羽目になる。このフォローする人間がいないと、藤井の能力は日の目を見ない。

藤井の発案で地域社会での活動が始まる時、決まって宮城が一緒である。藤井はアイディアマンであるが、組織化したり、プログラムをつくることはない。もしかしたらできないのかもしれない。逆に、宮城は、具体的に展開する秀でているが、現状を否定するような発想は不得手である。

このふたりが二人三脚で動くときは、沢山の人々が影響を受け、大きな動きになる。しかし、単独で動くときは、これといった目を見張るような動きにはなり難い。もしも、単独で大きな動きができるようなときは、また別人で相手役があるときである。

二、親友らしきものがない藤井

藤井は、寂しがり屋である。一人ぼっちで過ごすことが苦手である。時間があると藤井は、社内の人を誰かれなしにつかまえては、議論をぶつける。社内で飽きたら、宮城のところに行く。宮城も結構多忙ではあるが、藤井の訪問を快く迎える。

宮城は、大概は黙ってニコニコしながら話を聞いている。聞き流しているのではない。一生懸命に聞いている。自分の弱点をこのときばかりと補う。

宮城は、突飛もない藤井の発想にいつも驚かされる。また、ひとつのことに拘らず、会う度に考えが変わっていることに驚かされる。

この「驚かされる」ことが結構宮城の事業や経営のヒントになるし、頭の体操になる。更には、納得できた藤井の発想については、自分が実行隊長として行動を開始する。いわゆる二人三脚で社会に竜巻を起こすことになる。

三・宮城の人脈に頼る藤井

藤井は、意識しているわけではないのだが、人を利用して利用されることを極力嫌う。また、人にリードされることを嫌がる。そのためか、藤井には宮城を除いて、割り切った付き合い方

人はいっても、対等な関係で心から付き合い合う人はいない。藤井が比較的「知ってくれている」と思っている穂とでも、余程ビジネスか何かでない限り、何となく付き合い難いのか近づこうとしない。

藤井と親しい宮城が親身になって付き合ってくれるかというところでもない。藤井の悩み事を聞いても宮城は殆ど答えない。答えられないのではなく、答えないようにしている節がある。藤井の社会に深入りするのが嫌なのである。だが、宮城は自分にはないものを沢山持っている。藤井とは親しい関係を末永く持ち続けたいと思っている。

宮城の応え方は自分が世話になった人たちの中で、専門的に応えてくれそうな人を紹介する。また紹介して上手く行くケースが少ないことを承知で紹介する。紹介する人にもその事情を伝える。孤独な藤井は宮城によって補境され、宮城の人脈で助けられている。

宮城と藤井とは、人付き合いを考える上で色々と勉強になる。

おわり